

コーピング行動の性差の検討

— 性役割の観点から —

筑波大学大学院(博)心理学研究科 金 愛慶

筑波大学心理学系 小川 俊樹

Gender differences in coping behaviors from a sex-role perspective

Aekyoung Kim and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

This study examines two questions: First, are there any gender differences in the coping behaviors in the controlled stress situation?, Second, is there any relation between sex-role traits and coping behaviors? Two hundred and forty-four (male=123, female=121) undergraduate students assessed themselves on the Interpersonal and Achievement Stressor Scale, Japanese Bem Sex Role Inventory, and the Way of Coping-R. Although the amount of stress experience and stress sensitivity was controlled, gender differences were found in problem-solving, seeking social support, and positive-reappraisal coping. Females gained higher scores than males regarding these coping behaviors. These findings suggest that females are more likely to cope with interpersonal and achievement stress situations. In addition, both males and females showed positive correlations between masculinity and problem-solving, and between masculinity and positive reappraisal coping. Furthermore, a positive correlation between femininity and seeking social support coping was found for both sexes. In males, however, escape-avoidance coping positively correlated with masculinity, and self-control, wishful-thinking and positive-reappraisal coping negatively correlated with femininity. In females, wishful-thinking coping negatively correlated with masculinity. These findings suggest that there are different aspects as well as common aspects in the relationship between sex-role traits and coping behaviors for both of males and females. That is, although males and females have the same sex-role traits, the coping behaviors appear to depend on sex.

Key words: coping, gender difference, sex-role traits.

問題と目的

同じ災難を経験しても精神的身体的不健康になる度合いは人によって異なる(Baum, Fleming, & Singer, 1986; Billing & Moos, 1984; Folkman, Lazarus, Gruen, & DeLongis, 1986; Pearlin & Schooler, 1978). それは、受けたストレスを有効に低減させる試みがとれるか否かが個人の資質やおかれた状況によって異なるからである。このように心理的スト

レス状態で生じる外的及び内的要求をマネジメントしようとする個人の認知的・行動的努力をコーピング(coping)という(Folkman & Lazarus, 1984). そして、個人がストレス状態をマネジメントするために用いる実際の特異的な行動もしくは認知的操作をコーピング行動という。例えば、原子力発電所の放射能漏れがあったスリーマイル島で健康とコーピングとの関連を調べたBaum et al. (1986)によると、開き直りなどの情動に焦点を当てたコーピングが頭

痛や吐き気などの身体的兆候や抑うつ気分を押さえるのに有効であったことが報告されている。このように、コーピングと精神的・身体的健康との関連が報告される中でコーピングはストレスと心理的健康を媒介する鍵概念となり、健康心理学の分野ではコーピングと精神的・身体的健康との関連及びコーピングの個人差の検討に関する数多くの研究がなされてきた。

これまで検討されてきたコーピングの個人差の最も代表的な要因として性別を挙げることができる(Endler & Parker, 1989; Folkman & Lazarus, 1980; Funabiki, Bologna, Pepping, & Fitzgerald, 1980; 山野・神村・坂野, 1992)。例えば、地域社会の45-64歳の成人を対象としたFolkman et al. (1980)では、「課題中心」(問題解決のための行動計画・情報収集・行動化・自己制御などに勤める, 他者に問題解決の援助を求めるなど)と「情動中心」(事態の肯定的な面の評価や問題解決に対する願望的思考及び気晴らしに勤める, 問題から注意をそらすなど)の二つの下位概念に分類されたコーピング尺度を作成し、仕事関係のエピソードで女性より男性が問題焦点型のコーピングをより多く行うことを示した。

大学生を対象としたEndler et al. (1989)では、「課題志向」(計画の設計や実行に勤める, 事態の理解に勤める, 失敗からの改善点を分析するなどの項目)・「情動志向」(感情的になる, 感情的になった自分を責める, よりいい一時や場所などの白昼夢を見るなどの項目)・「回避志向」(摂食する, 友人を訪問する, 映画を見るなどの項目)という3つの下位尺度で構成されたコーピング尺度を用い、女性が男性より情動中心・回避中心型コーピングを有意に多く用いるという結果を示した。

同じく大学生を対象とした山野他(1992)では、「接近型」(行動計画や実行・情報収集に勤める, 類似した過去の経験を想起するなどの項目)コーピングでは性差が見られなかったが、「回避型」(他のことに集中する, リラックスする, 問題からの思考回避をするなどの項目)のコーピングでは女性が男性より有意に高い値を示すという結果が得られた。

Funabiki et al. (1980)の研究では、大学生を対象とし抑うつ傾向の高群間のコーピングの性差を検討した結果、女性は男性に比べ、自己不賛成, 摂食, 敵意を持つ, 気持ちを文章で表すといったコーピング行動に有意に従事しているという結果が得られた。

このように、これまで報告されたコーピングの性差は、必ずしも一貫しておらず、安定した結果が得られているとは言い難い。すなわち、問題中心型コー

ピングで性差が見られたのはFolkman et al. (1980)のみであり、その他の研究では問題中心型コーピングにおける性差は見られなかった。また、回避型コーピングについてはEndler et al. (1989)と山野ら(1992)で共通した結果が得られているが、情動焦点型コーピングにおける結果は一貫性に乏しい。

先行研究で明らかにされた性差に一貫性が無い理由としては、それぞれの研究で用いられたコーピング尺度の違いに加え、大きな手続き上の問題点を2つ挙げることができる。第1に、これまでの研究の間で男女対象者間の人口統計学的背景が一樣ではない。Folkman & Lazarus (1980)も、問題解決型コーピングにおける性差に関し、調査対象であった中年層男女の仕事の状況の背景が異なっていたことに起因しているのではないかと考察しており、対象者の人口統計学的背景がコーピング行動の性差に影響を及ぼすことが示唆される。

第2に、先行研究間で装置されたストレス場面が一樣ではないことが挙げられる。すなわち、①性差を検討したほとんどの研究では、対象者たちにストレスフルであったストレス場面を自由記述させ、そのときのコーピング行動を記述させるか、もしくは、②研究者側からストレス場面を提示し、その場面でのコーピング行動を評定させる方法を用いている。①の方法だとストレス場面そのものが統制されていないために、性差の結果がでて、それはストレス場面の影響による差であるか性別特徴(gender traits)による差であるかが明確でなくなる。また、②の方法だとストレス場面は統制されているとはいえ、ストレス場面の経験の有無やストレスの認知的評価の程度の個人差がコーピング行動に与える影響を排除できなくなる。Folkman & Lazarus (1984)のストレス論によると、ある出来事がストレスになるには個人の出来事に対する認知的評価が重要であり、実際にストレスを経験し、ストレスフルであると評価するか否かがコーピングに影響するとされている。それ故、コーピングの性差を検討するためにはストレス場面を統制し、それらのストレス場面の経験の有無(ストレス経験量)とそれらの場面に対して個人がどの程度ストレスフルに感じるかという認知的評価(本研究ではこれをストレス感受性と定義する)を併せて検討しなければならぬと思われる。

以上より、本研究では社会学的背景が類似している大学生を対象として、ストレス場面を統制し、さらにストレス経験量と感受性を統制した上で、コーピング行動の性差を検討することを第1の目的とする。

加えて、コーピングの性差を検討したこれまでの

先行研究では単なる性差の記述にとどまっておらず、なぜ性差が生じるのかという背景について検討されてこなかった。唯一 Folkman & Lazarus (1980) では男女の性役割の違いからコーピングにおける性差があらわれることを仮定している。しかし、彼らの研究の中では実際の性役割特性についての測定は行われておらず、男性は道具性・分析的・問題解決的スキルをより大事にするように教育され、女性は情動的、繊細的、表現的、依存的であるように社会化されるという伝統的な知見に基づき、コーピング・パターンにおける性差を説明している。

確かに Folkman & Lazarus (1980) が仮定したように、男性役割と女性役割を両極に置く一元性のものでとらえることも可であろう。しかし、現代社会の役割構造の変化に伴って、伝統的な男性役割と女性役割の区別は曖昧となり、現代を生きる人々はいずれの役割も担わざるを得なくなりつつある。従って、自分が男か女かという性同一性とは異なり、男性役割・女性役割は両極の概念としてではなく、独立した2つの次元としてとらえるべきであろう。実際、社会心理学の分野の多くの研究者がこのような主張を繰り返している(安達・上地・浅川, 1985; Bem, 1974, 1975; Constantinople, 1973; Heilbrun, 1976; 伊藤, 1978; Jenkin & Voegh, 1969; 柿坂, 1981; 三上, 1981)。その中で最も代表的な学者である Bem (1974) は、課題達成志向の道具的、活動的行動特性 (instrumental-agentic traits) を masculinity とし、円満な対人関係志向の情動表現的—コミュニケーション的な行動特性 (Emotional expressiveness-communicational traits) を femininity とし、両者を独立した概念として位置づけた (Spence, 1984; 伊藤, 1986)。そして、Bem (1975) は、男性役割と女性役割を兼ね備えた心理的両性性 (psychological androgyny) の人が最も適応に富み、心理的健康度が高いと主張した。

この Bem (1975) の主張に基づき、多くの研究者によって、性役割オリエンテーションと心理的健康度との関連が検討されてきた (Antill & Cunningham, 1979; Kelly & Worrell, 1977; Sanfilippo, 1994; Stoppard & Paisley, 1987; Silver & Ryan, 1979; Taylor & Hall, 1982; Zuckerman, 1989)。中でも性役割特性と抑うつ傾向との関連を検討した研究 (Sanfilippo, 1994; Stoppard & Paisley, 1987; Taylor & Hall, 1982; Zuckerman, 1989) では生物学的な性ではなく masculinity をより多く身につけている人が抑うつ傾向が低く、femininity の高い男性の自己評価の低さや抑うつ傾向の高さが一貫して報告されている。

以上で見てきたように従来の研究では性役割特性

と個人の心理的健康との関連、コーピングと個人の心理的健康との関連がそれぞれ別々の研究領域で独自に研究されてきた。しかし、性役割特性は一種の行動特性であり、個人のオリエンテーションしている性役割特性がコーピング資源としてコーピング行動に影響を与えていることが想定される。そこで、本研究の第2の目的として、性役割特性とコーピング行動との関連を検討することにした。

方法

被調査者 4年制大学の学生の337名に対して質問紙が実施され、すべての質問項目に回答をしたのは244名であった。そのうち、男性が123名(平均年齢=19.53, SD=1.13)、女性121名(平均年齢=19.34, SD=1.17)であった。

質問紙

1. ストレッサー尺度 Waelde, Silvern, & Hodges (1994) によって作成された大学生用の対人関係ストレッサー尺度 (以下, ISS; Interpersonal Stressor Scale) 19項目と達成関係ストレッサー尺度 (以下, ASS; Achievement Stressor Scale) 11項目を日本語訳し、用いた。まず、日本の大学生には不適切な項目を排除するために、3人の評定者からの一致率を求め、60%に満たなかった対人関係の3項目(離婚・別居、子どもからの手離れの増加、性行為の減少)を削除し、最終的には27項目を用いた。そして、対人関係イベントと達成関係イベントに対する実際の経験度を測るためにその「有(1)・無(2)」を回答させた。さらに、ストレス感受性を測るために、これらのライフイベントに対して「そのような出来事が起こった時、大変さ・つらさ・しんどさ・不愉快さなどをどの程度感じたか」を「全く感じない(0)」から「非常に感じる(4)」までの5段階で評定を求めた。

2. コーピング尺度 Folkman and Lazarus (1986) によって作成された the Ways of Coping-R (以下, WOC-R) の問題焦点型コーピングの28項目、情動焦点型コーピングの38項目、計66項目を日本語訳し、用いた。個人のコーピング行動の傾向を収集するために、「友達とのトラブル」という対人関係ストレス場面と、「学業上の負担の増加」という達成関係ストレス場面の二つの代表的な場面でのコーピング行動を「用いなかった(0)」から「かなり用いた(3)」までの4段階で評定させた。

3. 性役割特性の測定 安達・上地・浅川(1985) によって作成された日本版 BSRI (Bem Sex Role Inventory) の masculinity 尺度と femininity 尺度、そ

れぞれ20項目を用いた。そして、各項目に対して「全く当てはまらない(0)」から「非常に当てはまる(6)」までの7段階により評定を求め、それらの合計得点をもって、masculinity得点、femininity得点とした。
調査時期・手続き 調査は1994年10月上旬から11月中旬にわたって授業の時に集団法で実施された。

結果及び考察

1. 尺度の検討と基礎統計

邦訳版であるストレッサー尺度 (ISS, ASS) と WOC-R の妥当性を検討するために、まずそれぞれの尺度の因子分析による因子的妥当性と各下位尺度の α 係数を求めた。

1) ストレッサー尺度 (ISS, ASS) の妥当性の検討

ストレッサー尺度の因子的妥当性を検討するために ISS の19項目と ASS の11項目を込みにし、ストレス感受性の得点を用いて因子分析(主成分法)を行った結果、2因子が抽出され、パリマックス回転

を行った。その後、因子負荷量が.40に満たない項目といずれの因子にも高い因子負荷量を示す項目を除外して最終的に項目を選択した。

その結果、第1因子に分類された項目は、「友人/親・兄弟がひどく健康を損なうこと」「家族の死」「親・兄弟との関係の悪化」「恋人との関係が悪くなること」など因子の負荷量が高く、12項目すべてが Waelde et al. (1994) の ISS の項目と一致した。そして、第2因子に分類された項目は、「仕事上の負担が増えること」「借金が增えること」「教授や上司とのもめごと」「学業上の負担が増えること」などの因子負荷量が高く、11項目すべてが Waelde et al. (1994) の ASS の項目と一致した。以下のすべての分析においては最終的に選定された ISS の12項目と ASS の11項目が用いられた。次に、ISS と ASS のクロンバックの α 係数を求めたところ、それぞれ.86 と.84で十分な内的一貫性が認められた (Table 1)。

最後に、男女別にストレス経験量とストレス感受性における ISS と ASS 間の相関を求めた。結果を

Table 1 Results of Factor Analysis and Cronbach's Alpha Reliability of Stressor scale

Item & name of factor	Factor 1	Factor 2	h^2
9. Interpersonal stressor (12-items; $\alpha = .86$)	.704	.206	.538
10.	.690	.177	.507
6.	.667	.238	.501
14.	.650	.147	.444
16.	.594	.200	.393
3.	.584	.154	.365
12.	.576	.352	.456
8.	.574	.169	.358
5.	.560	.229	.366
4.	.521	.348	.392
11.	.517	.383	.415
1.	.487	-.146	.259
7.	.376	.167	.169
26.	.517	.410	.436
20. Achievement stressor (11-items; $\alpha = .84$)	-.004	.727	.529
17.	.138	.695	.502
18.	.066	.676	.461
27.	.316	.637	.505
19.	.096	.612	.384
22.	.172	.574	.358
13.	.350	.566	.443
15.	.352	.542	.418
23.	.357	.490	.368
30.	.167	.439	.221
21.	.213	.415	.218
25.	.424	.456	.388
24.	.402	.453	.366
Eigenvalue	8.729	2.030	

Table 2に示す。男性では、ISSのストレス経験量とASSのストレス経験量との間には有意な正の相関が見られた($r=.61, p<.01$)。そして、ISSのストレス感受性とASSのストレス感受性との間にも有意な正の相関が見られた($r=.71, p<.01$)。女性では、ISSのストレス経験量とASSのストレス経験量との間には有意な正の相関が見られた($r=.52, p<.01$)。そして、ISSのストレス感受性とASSのストレス感受性との間にも有意な正の相関が見られた($r=.78, p<.01$)。従って、以後の分析においては、ストレス経験量とストレス感受性の得点としてISSとASSの合成得点が用いられた。

2) WOC-Rの妥当性の検討

WOC-Rの分析はすべて対人関係と達成関係の2つのストレス状況での回答を込みにして行われた。まず、WOC-Rの66項目のうち回答に極端な偏りのある(平均値が1.5以下、あるいは3.5以上)5項目を削除し、残った61項目について因子分析(主因子法)を行ったところ、6因子(スクリー法)が抽出された。そして、因子負荷量が.40に満たない項目と他の因子でも高い因子負荷量を示す項目を除外して最終的に項目を選択した。結果的に、第1因子は17項目、第2因子は10項目、第3因子は6項目、第4因子は6項目、第5因子は6項目、第6因子が4項目が得られ、計48項目が残った。回転後の因子負荷量行列をTable 3に示す。

第1因子は、「何をしなければならぬかということがわかっていたので、うまくいくように一層努力した」、「物事がうまくいくように、やり方を変えてみた」、「その問題に対していくつかの異なる解決策を導き出した」などの項目の因子負荷量が高いことから、「問題解決(Problem-solving)」のコーピングと命名した。

第2因子は、「自分の感情をあまり外に出さないように努めた」、「そのことが自分にとってどんなに嫌なことかを、他人にはわからないようにした」、「事態を和らげるために、あまりむきにならないよ

うにした」などの項目の因子負荷量が高いことから、「自己制御(Self-control)」のコーピングと命名した。

第3因子は、「自分がどんな気持ちであったかを、誰かに話したりした」、「自分が信頼している知人や友人に助言を求めた」、「状態をもっとハッキリつかもうと思って、誰かに話しかけた」などの項目の因子負荷量が高いことから、「ソーシャル・サポートを求める(Seeking social support)」コーピングと命名した。

第4因子は、「ひたすら事態が好転することを望んだり、空想したりした」、「ただ祈るのみだった」、「このようなことがなければいいのにと、またあったとしてもすぐに終わってしまえばいいのと思ったりした」などの項目の因子負荷量が高いことから、「願望的思考(Wishful-thinking)」のコーピングと命名した。

第5因子は、「すべて忘れてしまうことにした」、「ジョギングをしたり、運動をしてみたりした」、「いつもより長く眠った」などの項目の因子負荷量が高いことから、「逃避・回避(Escape-avoidance)」のコーピングと命名した。

第6因子は、「人生における大事なものを再発見できたと思おうとした」、「成長して、より良い人間になろうとした」、「今までよりも良い経験を身につけることができたと思おうとした」などの項目の因子負荷量が高いことから、「肯定的再評価(Positive-reappraisal)」のコーピングと命名した。

Folkman et al. (1986)の結果では、①問題に直面する(confrontive coping)、②距離を置く(distancing)、③自己制御(self-controlling)、④ソーシャル・サポートを求めるコーピング(seeking social support)、⑤自責(accepting responsibility)、⑥逃避・回避(escape-avoidance)、⑦計画的問題解決(planful problem-solving)、⑧肯定的再評価(positive-reappraisal)の8つの因子が抽出されている。本研究の6因子の結果をFolkman et al. (1986)による結果と比較検討すると次のようになる。

Table 2 Pearson correlation coefficients in the stress experience and stress sensitivity, and coping behaviors

	ISS-experience	ASS-experience	ISS-sensitivity	ASS-sensitivity
ISS-experience	—	.61**	-.01	-.09
ASS-experience	.52**	—	-.10	-.05
ISS-sensitivity	-.35**	-.31**	—	.71**
ASS-sensitivity	-.38**	-.25*	.78**	—

Note. Males (n=123) are above the diagonal; females (n=121) are below the diagonal.

ISS is Interpersonal Stressor Scale, and ASS is Achievement Stressor Scale.

*: $p < .05$, **: $p < .01$, two-tailed.

Table 3 Results of Factor Analysis and Cronbach's Alpha Reliability of the Ways of Coping-R

Item & name of factor	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4	Factor 5	Factor 6	h^2
49. Problem-solving	.689	-.109	.054	.045	-.048	.214	.539
50. ($\alpha = .89$)	.675	-.017	.122	.073	.061	.254	.544
52.	.674	.074	.055	.128	.073	.063	.489
24.	.667	.093	.016	.053	.114	.015	.470
26.	.650	-.274	-.042	.043	.154	.171	.554
46.	.596	-.080	.163	.028	.155	.236	.468
48.	.566	.046	.152	-.058	.251	.010	.411
61.	.530	.093	.053	.275	.005	-.024	.369
35.	.526	.214	.136	-.007	-.030	-.004	.342
6.	.504	.019	.341	.021	-.225	.115	.435
63.	.499	.027	.220	.074	.263	.168	.401
2.	.489	.165	.100	.035	-.104	.150	.311
62.	.470	.097	.314	.072	-.138	.219	.401
56.	.467	.153	.191	.158	.188	.249	.400
65.	.449	.290	.180	.246	.109	-.025	.391
37.	.440	.154	.014	-.091	.235	.206	.323
1.	.404	.055	.072	-.041	-.076	.319	.281
54.	.394	.352	.060	.097	-.024	.187	.328
19.	.375	.178	.311	.214	.047	.253	.381
14. Self-control	-.010	.639	-.062	.057	-.017	.164	.443
43. ($\alpha = .78$)	.194	.639	-.082	.104	-.014	.158	.488
44.	.250	.586	.038	-.072	.050	.246	.475
13.	-.173	.552	.055	.038	.305	.059	.436
5.	.030	.531	.187	.241	.043	-.045	.380
4.	-.374	.523	.089	.087	.304	-.041	.524
25.	.074	.451	.240	.306	-.067	-.087	.372
10.	-.057	.443	.129	-.025	.400	-.048	.379
40.	.133	.437	-.110	.013	.169	.057	.253
41.	.080	.418	.072	.294	.241	-.080	.337
9.	.203	.398	.311	.178	-.150	.296	.438
64.	.355	.398	.133	.001	.112	.161	.340
29.	.174	.353	.228	.310	-.041	.179	.337
27.	.327	.336	.154	.171	.243	-.183	.366
53.	-.034	.304	.002	.132	.294	.156	.222
45. Seeking social support	.157	.062	.793	.047	.053	.115	.675
42. ($\alpha = .84$)	.149	-.039	.787	.061	.064	.053	.654
8.	.131	.068	.734	.068	-.025	.058	.570
7.	.043	.152	.687	.119	.116	.120	.539
18.	.131	.046	.606	.191	.142	.062	.446
31.	.406	-.067	.527	.141	.095	.011	.476
59. Wishful thinking	.051	.071	.085	.780	.148	.088	.652
60. ($\alpha = .79$)	.039	.047	.017	.667	.321	.023	.552
58.	.156	.188	.227	.620	-.089	.011	.504
11.	-.062	-.020	.060	.617	.306	.109	.493
57.	.178	.168	.102	.598	.194	.065	.471
55.	.305	.173	.247	.428	.071	.148	.393
51.	.297	.295	.152	.373	-.002	.075	.343
21. Escape-avoidance	-.124	.277	-.073	.311	.523	.060	.472
66. ($\alpha = .71$)	.228	.039	.059	.113	.473	.163	.320
16.	.114	-.015	.021	.112	.467	.027	.245
32.	.156	.290	.177	.140	.458	-.057	.372
12.	-.208	.173	.006	.446	.449	.192	.511
33.	.089	.047	.034	.283	.424	-.189	.307
20.	.328	.098	.007	.072	.400	.286	.365
28.	.259	.047	.324	-.033	.390	.190	.364
3.	.017	.252	.255	.174	.300	.118	.263
38. Positive reappraisal	.395	.056	.129	.086	.118	.686	.668
23. ($\alpha = .80$)	.267	.202	.164	.100	.013	.620	.533
30.	.423	.068	.191	.078	.088	.607	.602
15.	.245	.231	.128	.112	.138	.537	.449
36.	.384	.123	.040	.107	.176	.436	.397
Eigenvalue	12.747	4.996	2.797	2.450	1.750	1.527	

「自己制御」, 「ソーシャル・サポートを求めるコーピング」, 「逃避・回避」, 「肯定的再評価」の4つ因子においては大まかに一致した結果を示している。そして、本研究の「問題解決」の因子は、Folkman et al. (1986)の⑦計画的問題解決の因子と①問題に直面するコーピングの因子の一部が合成したものと考えられる。また、Folkman et al. (1986)の②距離を置くコーピングの一部と⑤自責のコーピングの一部が、それぞれ本研究の「逃避・回避」の因子と「自己制御」の因子に統合されている。そして、Folkman et al. (1986)の研究では1つの因子として成立しなかったが、本研究では「願望的思考」という新しい因子が構成された。Folkman et al. (1986)の研究で確立していたが本研究で他の因子に統合してしまった①問題に直面する、②距離を置く、⑤自責の3つの因子はいずれも α 係数が.70に満たない因子であった。本研究のWOC-Rの6つの因子のクロンバックの α 係数は.71から.89の範囲であり、それぞれの尺度における十分な内的一貫性が認められた(Table 3)。

次に、男女別に対人関係ストレス状況でのコーピング行動と達成関係ストレス状況でのコーピング行動間の相関を求めた。男性では、「問題解決」($r = .76, p < .01$)、「自己制御」($r = .59, p < .01$)、「ソーシャルサポートを求めるコーピング」($r = .63, p < .01$)、「願望的思考」($r = .59, p < .01$)、「逃避・回避」($r = .65, p < .01$)、「肯定的再評価」($r = .75, p < .01$)のすべての因子において有意な正の相関が見られた(Table 4)。女性でも、「問題解決」($r = .68, p < .01$)、「自己制御」($r = .62, p < .01$)、「ソーシャルサポートを求めるコーピング」($r = .58, p < .05$)、「願望的思考」($r = .61, p < .01$)、「逃避・回避」($r = .71, p < .01$)、「肯定的再評価」($r = .69, p < .01$)のすべての因子において有意な正の相関が見られた(Table 4)。従って、以下の分析においては、各因子ごとのコーピング行動の得点として対人関係ストレス状況でのコーピング行動と達成関係ストレ

ス状況でのコーピング行動の合成得点が用いられた。

3) ストレス経験量, ストレス感受性, 性役割特性の性差

ストレス経験量, ストレス感受性, 性役割特性の性差の結果を Table 5に示す。ストレス経験量においては、ISS($t(242) = -2.81, p < .01$)とASS($t(242) = -1.98, p < .05$)の両方で女性が男性よりそれらのストレスをより多く経験したという結果が得られた。しかし、ストレス感受性においては性差はみられなかった。性役割特性においては、masculinityの次元で男性が女性より高い得点を示したが($t(242) = 4.40, p < .001$)、femininityの次元では性差は見られなかった。

2. コーピング行動の性差の検討

コーピング行動の性差を検討するために、ストレス経験量とストレス感受性を共変量とした1要因の共分散分析を行った。その結果を Table 6に示す。性差が見られたのは「問題解決」($F(2, 241) = 6.19, p < .01$)、「ソーシャルサポートを求めるコーピング」($F(2, 241) = 25.48, p < .001$)、「肯定的再評価」($F(2, 241) = 4.08, p < .05$)の3つの因子であり、いずれの因子においても女性が男性より高い値を示した。「問題解決」の因子は山野他(1992)の接近型とEnderl et al. (1989)の課題志向のコーピングに相当するものであるが、これらの研究で性差は見られていない。しかし、本研究では「問題解決」の因子において女性が男性より高い値を示した。これは、男性は道具性・分析的・問題解決のスキルをより大事にするように教育され、女性は情動的、繊細的、表現的、依存的であるように社会化されるという伝統的な知見による一般的な予想とは大幅に異なる結果であった。本研究の「逃避・回避」の因子は山野他(1992)の回避型とEnderl et al. (1989)の回避志向のコーピングに相当するが、この因子における性差は見られなかった。「ソーシャル・サポートを求め

Table 4 Pearson correlation coefficients between coping behaviors in interpersonal and achievement stress situation in males and females

	Coping behavior					
	PS	SC	SSS	WT	EA	PR
Males (n=123)	.76**	.59**	.63**	.59**	.65**	.75**
Females (n=121)	.68**	.62**	.58*	.61**	.71**	.69**

Note. PS is Problem-solving, SC is Self-control, SSS is Seeking social support, WT is Wishful thinking, EA is Escape-avoidance, and PR is Positive reappraisal.

*: $p < .05$, **: $p < .01$, two-tailed.

Table 5 Gender differences in the stress experience, stress sensitivity, and sex-role traits

Scale	Male (n=123)	Female (n=121)	t
Stress experience			
ISS	2.53 (2.33)	3.37 (2.35)	-2.81 **
ASS	3.20 (1.88)	3.69 (1.95)	-1.98 *
Stress sensitivity			
ISS	32.64 (10.49)	33.50 (11.13)	-0.63 n.s.
ASS	23.28 (8.35)	24.04 (9.72)	-0.66 n.s.
Sex-role traits			
Masculinity	74.95 (16.68)	65.94 (15.29)	4.40 ***
Femininity	70.70 (12.34)	21.10 (12.55)	-0.34 n.s.

Note. ISS is Interpersonal Stressor Scale, and ASS is Achievement Stressor Scale.

Standard deviations show in parentheses.

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, two-tailed.

Table 6 Gender differences in coping behaviors by Analysis of Covariance with stress experience and stress sensitivity

	Mean(SD)		F
	Male (n=123)	Female (n=121)	
Problem-solving	39.94 (16.11)	46.42 (15.76)	6.19 **
Self-control	21.12 (8.51)	21.10 (9.34)	0.20 n.s.
Seeking social support	14.16 (7.42)	19.51 (7.69)	25.48 ***
Wishful thinking	7.88 (2.78)	9.11 (2.12)	2.70 n.s.
Escape-avoidance	8.94 (5.20)	8.69 (5.93)	0.36 n.s.
Positive reappraisal	10.44 (6.08)	12.49 (5.68)	4.08 *

Note. Standard deviations show in parentheses.

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, two-tailed.

るコーピング」と「肯定的再評価」は、ストレスラーによって喚起されるネガティブな情動を低減させようとするなど情動に焦点を当てるという点でEndler et al. (1989)の情動志向のコーピングと類似しており、女性が男性より多く用いるという性差とも一致している。

以上をまとめると、情動中心型のコーピングである「ソーシャル・サポートを求めるコーピング」と「肯定的再評価」の因子の結果のみが先行研究と一致したことを除いて、「問題解決」と「逃避・回避」の因子では先行研究と異なる結果となった。このような結果の理由として、まずコーピング行動を対人関係ストレス状況と達成関係ストレス状況の場面のみで抽出していることが考えられる。しかし、対人関係ストレス状況と達成関係ストレス状況のコーピング行動との間に有意な強い正の相関が見られており、個人のコーピング行動は異なるストレス状況下でもある程度一貫して傾向を持っていることが示唆される。従って、本研究のコーピング行動の性差の

結果がストレス場面によるものであるとは考えがたい。本研究と先行研究の結果の相違に関しては、後の全体的考察で論述する。

3. 性役割特性がコーピング行動に及ぼす影響

性役割特性がコーピング行動に及ぼす影響を検討するために、性役割特性を説明変数、コーピング行動を被説明変数として重回帰分析を行った。コーピング行動と性役割特性の性差が見られたため分析は男女別に行われた。結果をTable 7に示す。

まず、重相関係数(R)について見ると、男性の場合は、「問題解決」($R = .38, p < .01$)、「自己制御」($R = .42, p < .01$)、「ソーシャル・サポートを求めるコーピング」($R = .36, p < .01$)、「願望的思考」($R = .44, p < .01$)、「逃避・回避」($R = .35, p = .01$)、「肯定的再評価」($R = .44, p < .001$)のすべてのコーピング行動において性役割特性の有意な説明率が示された。しかし、女性の場合は有意な説明率を示したのは「問題解決」($R = .46, p < .001$)と「ソーシヤ

Table 7 Multiple correlation coefficients and standard partial regression coefficients between coping behaviors with sex-role traits

Unexplanatory variable	Explanatory variable		
	Masculinity	Femininity	R
Male (n=123)			
Problem-solving	.28**	.25	.38**
Self-control	.06	.30**	.42**
Seeking social support	.08	.27**	.36**
Wishful thinking	-.12	.33**	.44**
Escape-avoidance	.25*	.05	.35**
Positive reappraisal	.21*	.25*	.44***
Female (n=121)			
Problem-solving	.39***	.01	.46***
Self-control	.02	.00	.06
Seeking social support	-.14	.24*	.34*
Wishful thinking	-.21*	.04	.21 [†]
Escape-avoidance	.02	-.10	.08
Positive reappraisal	.20*	-.05	.25 [†]

Note. [†]: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, two-tailed.

ル・サポートを求めるコーピング」($R = .34$, $p < .05$)の因子のみであった。そして、「願望的志向」($R = .21$, $p < .08$)と「肯定的再評価」の因子($R = .25$, $p < .07$)では有意傾向が見られてはいるが、「自己制御」と「逃避・回避」の因子では説明率が有意ではなかった。以上の結果から、性役割特性のコーピング行動への説明率は男女によって異なっており、女性の場合は性役割特性のみによる説明は困難であることがうかがわれる。

次に、標準偏回帰係数について見ると、男性の場合は、「問題解決」($\beta = .28$, $p < .01$)、「逃避・回避」($\beta < .25$, $p < .05$)、「肯定的再評価」($\beta = .21$, $p < .05$)の3つのコーピングにおいて、masculinityの次元が有意な正の値を示した。そして、「自己制御」($\beta = .30$, $p < .01$)、「ソーシャル・サポートを求めるコーピング」($\beta = .27$, $p < .01$)、「願望的思考」($\beta = .33$, $p < .01$)、「肯定的再評価」($\beta = .25$, $p < .05$)の4つのコーピングに関してはfemininityの次元が有意な正の値を示した。女性の場合は、masculinityの次元が「問題解決」($\beta = .39$, $p < .001$)、「肯定的再評価」($\beta = .20$, $p < .05$)のコーピングに関しては有意な正の値を、「願望的思考」($\beta = -.21$, $p < .001$)に関しては有意な負の値を示した。そして、femininityの次元は「ソーシャル・サポートを求めるコーピング」($\beta = .27$, $p < .01$)に関してのみ有意であった。

以上の結果によって性役割特性がコーピング行動にいかに関わっているかをより詳細に検討すると、

次のようなことが示唆される。masculinityの次元の得点が高くなるほど問題解決と肯定的再評価のコーピングが多くなる点と、femininityの次元の得点が高くなるほどソーシャル・サポートを求めるコーピングが多くなる点では男女ともに共通している。ところが、男性ではmasculinityと逃避・回避のコーピングとの間にも正の相関があり、masculinityが高いと問題の解決や問題に対する肯定的な評価といった問題に取り組もうとするコーピングだけでなく、問題から注意を逸らすなどの息抜きのコーピングも行っている。一方で、女性ではmasculinityが高くなるほど願望的思考のコーピングを行わないという結果も得られ、masculinityが高いほど問題の解決に対する願望的思考は行わず、問題の解決や問題に対する肯定的な評価のような問題に注意を向けて取り組もうとするコーピングを行っている。また、femininityとコーピングとの関連を検討すると、女性ではfemininityとソーシャル・サポートを求めるのコーピングのみで関連が見られたが、男性ではfemininityがソーシャル・サポートを求めるコーピングだけでなく、自己制御、願望的思考、肯定的な再評価とも関連している。以上の性役割特性とコーピング行動との標準偏回帰係数の結果から、男女によって性役割特性のコーピング行動への関わり方が異なっており、同じ性役割特性であってもそのコーピング資源としてはたつきは性別によって異なることが示唆された。

全体的考察と今後の課題

本研究では、コーピング行動における性差の検討、そしてその性差を助長する背景として個人の性役割特性をとり上げ、性役割特性とコーピング行動との関連の検討を行った。第1に、コーピングの性差の検討については、ストレス経験量とストレス感受性を統制したにも関わらず、問題解決、ソーシャル・サポートを求めるコーピング、肯定的再評価の3つのコーピング行動に性差があることが明らかになった。また、問題解決、ソーシャル・サポートを求めるコーピング、肯定的再評価の3つの因子すべてにおいて女性の方の得点が高いことから、女性が男性より対人関係や達成のストレスに対しより積極的に取り込んでいることが示唆される。さらに、女性の場合、ストレス経験量とストレス感受性との間に有意な負の相関がみられた。この結果に関し、女性が男性より全般的により多くのコーピング行動を行っているという結果と併せて考えると、女性の場合はストレスを多く経験してもコーピングを多く行うため、ストレスに対してストレスフルに感じないという結果が得られたのではないかと考えられる。

第2に、性役割特性とコーピングとの関連を検討した結果、性役割特性のコーピングとの直接的な関連性が認められた。特に、男女を問わず、masculinityの次元と問題解決・肯定的再評価のコーピングとの間に、そしてfemininityの次元とソーシャル・サポートを求めるコーピングとの間に有意な正の相関が見られた。従って、生物学的性を問わず性役割特性は一部のコーピング行動に共通した影響を及ぼすことが明らかになった。その一方で性による違いもまた見いだされた。例えば、femininityの次元とコーピングとの関連の結果を見ると、femininityが強くなるということは他者とのコミュニケーションや共感性などの対人的スキルを身につけていることとなり、そして他者との相互作用によるコーピングであるソーシャル・サポートを求めるコーピングを多く用いることになる。ただし、男性の場合には、femininityが強いことが単に対人的なスキルを持っていることを意味するだけではない。すなわち、femininityが高い男性はソーシャル・サポートを求めるコーピングに限らず、自分の衝動や感情を抑制しようとする自己制御のコーピング、問題の漠然とした改善を願う願望的思考のコーピング、物事の良い面を探そうとする肯定的再評価のコーピングも多く用いるという結果も見られた。

これらのコーピングは、問題そのものよりは情動に焦点を当てた消極的で受動的なコーピングであ

り、男性でfemininityが強いということは行動における受動性も強いことも意味することが示唆される。このように男女によって性役割特性の意味が異なる理由としては、男女によって性役割特性の社会的評価が異なることが考えられる。すなわち、femininityという特性の記述は同じものであっても、個人が身につけているfemininityに対する社会的評価は男女によって異なる。男女の役割に対する一般的な社会的期待として、男性はより男性的であることが、女性にはより女性的であることが求められており(柏木, 1973)、従って男性のfemininityに対する社会的な評価が相対的に高くないことが影響を及ぼしていると考えられる。実際、性役割特性と自己評価及び心理的健康との関連を検討した社会心理学のいくつかの研究(Antill & Cunningham, 1979; Kelly & Worrell, 1977; Silver & Ryan, 1979)では生物学的な性ではなくmasculinityをより多く身につけている人が適応が良いこととfemininityの高い男性の自己評価の低さや社会的適応の悪さが一貫して報告されている。心理的健康におけるコーピングの効果を検討したFolkman et al. (1986)は、自己制御や自責、逃避・回避などの情動に焦点を当てたコーピングが心理的健康とは負の相関があるが身体的健康とは正の相関があること、問題解決のコーピングは心理的健康と正の相関があることを指摘した。情動に焦点を当てたコーピングが必ずしも心理的健康と負の相関があるとは言いがたいが、Folkman et al. (1986)の知見に基づいて上記の社会心理学の研究の知見を吟味すると、男性でfemininityの強い群は情動に焦点を当てた受動的なコーピングを用いがちであり、それに対するネガティブな社会的評価が随伴され、心理的健康や社会的適応が悪い結果となったことが想定される。今回は性役割特性とコーピング行動との関連のみに注目し、精神的健康との関連までは検討していないので、今後は性役割特性、コーピング行動、心理的健康の三者関係についてさらに検討することが必要であろう。

また、性役割特性とコーピング行動との関連性に基づいて、コーピング行動における性差の結果を検討すると一つ大きな疑問が生じる。すなわち、男女ともにmasculinityの次元は問題解決および肯定的な再評価と正の相関があるが、女性が男性よりmasculinityが低いにも関わらず、問題解決および肯定的な再評価のコーピングにおける得点が高かったのがそれである。その理由の一つとして考えられるのは、ストレスに対するコミットメントの個人差である。Folkman & Lazarus (1984)によると、

あるストレスに対する個人のコミットメントの度合いによって個人にとってのストレスの重要度も異なること、さらにはコーピングの量も異なってくるのが指摘されている。今回の研究ではストレスの重要度は検討していないが、masculinityと問題解決コーピングとの標準偏回帰係数の結果で女性の方がより強い正の相関が出ていることや昨今の女子大学生の対人関係や課題に対するコミットメントの強さを考えると、ストレスに対するコミットメントの個人差が影響を及ぼしていることが想定される。この点についても今後検討が必要であろう。

以上より、コーピング行動における性差、また性役割特性とコーピング行動との直接的な関連性が明らかにされた本研究の結果は、コーピングにおける性差を含んだ個人差の理解を助けてくれたと思われる。

要 約

本研究は、次の2つを目的とする。第1の目的として、ストレス場面を統制し、コーピング行動における性差を検討する。第2の目的として、性役割特性がコーピング行動に与える影響を検討する。対人関係と達成関係のストレス尺度、日本版 Bem Sex Role Inventory, the Way of Coping Checklist-R が、男性123名、女性121名の大学生に実施された。ストレス経験量とストレス感受性を統制したにも関わらず、問題解決、ソーシャル・サポートを求める、肯定的再評価の3つのコーピング行動で有意な性差が見られ、いずれにおいても女性が男性より高い得点を示した。この結果から、対人関係と達成関係のストレス状況で女性がより多くのコーピングを行っていることが示唆された。そして、男女の両方で、masculinityの次元と問題解決および肯定的再評価コーピングとの間に、そしてfemininityの次元とソーシャルサポートを求めるコーピングとの間に有意な正の相関が見られた。さらに、男性ではmasculinityの次元と逃避・回避コーピングとの間に、またfemininityの次元と自己制御、願望的思考、および肯定的再評価コーピングとの間に正の相関が見られた。一方、女性ではmasculinityの次元と願望的思考との間に負の相関が見られた。以上の結果から、性役割特性とコーピング行動との関連性においては男女によって共通する面もあるが異なる面もあり、同じ性役割特性であっても性別によってコーピング行動に異なる影響を及ぼすことが示唆された。

引 用 文 献

- Antill, J. K. & Cunningham, J. D. 1979 Self-esteem as a function of masculinity in both sexes. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 783-785.
- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 1985 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究(1)―日本版BSRI作成の試み―日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 484-485.
- Baum, A., Fleming, R. S., & Singer, J. E. 1983 Coping with victimization by technological disaster. *Journal of Social Issues*, **39**, 117-138.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Bem, S. L. 1975 Sex role adaptation: One consequence of psychology androgyny. *Journal of Personality & Social Psychology*, **31**, 634-643.
- Billing, A. G. & Moos, R. H. 1984 Coping, stress, and social resources among adults with unipolar depression. *Journal of Personality & Social Psychology*, **46**, 877-891.
- Constantinople, A. 1973 Masculinity-femininity: An exception to a famous dictum. *Psychological Bulletin*, **60**, 389-407.
- Endler, N. & Parker, J. D. A. 1990 Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality & Social Psychology*, **58**, 844-854.
- Folkman, S. & Lazarus, R. S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health & Social Behavior*, **21**, 219-139.
- Folkman, S. & Lazarus, R. S. 1984 Personal Control and Stress and Coping Processes: A Theoretical Analysis. *Journal of Personality & Social Psychology*, **46**, 839-853.
- Folkman, S., Lazarus, R. S., Dunkel-Schetter, C., DeLongis, A., & Gruen, R. J. 1986 Dynamics of a stressful encounter: Cognitive appraisal, coping, and encounter outcomes. *Journal of Personality & Social Psychology*, **50**, 992-1003.
- Funabiki, D., Bologna, N. C., Pepping, M., & FitzGerald, K. C. 1980 Revisiting sex differences in the expression of depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **89**, 194-202.
- Heilbrun, A. B. 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **44**, 183-190.

- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造 — 性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み — 教育心理学研究, **34**, 168-174.
- Jenkin, N. & Vroegh, K. 1969 Contemporary concepts of masculinity and femininity. *Psychological Reports*, **25**, 679-697.
- 柿坂 緑 1981 性役割尺度の因子分析 日本心理学会第45回大会発表論文集, 553.
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割の習得 依田新・大西誠一郎・斉藤耕二・津留 宏・西平直喜・藤原喜悦・宮川知彰(編) 現代青年心理学講座5 現代青年の性意識 金子書房, 99-139.
- Kelly, J. A. & Worrell, J. 1977 New formulations of sex roles and androgyny: A critical review. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **45**, 1101-1115.
- 三上英子 1981 独立次元としての男性性・女性性 新しい性度尺度の制作をめぐって 日本心理学会第46回大会発表論文集, 551.
- Pearlin, L. I. & Schooler, C. 1978 The structure of coping. *Journal of Health and Social Behavior*, **19**, 2-21.
- Silvern, L. E. & Ryan, V. L. 1983 A reexamination of masculine and feminine sex-role ideals and conflicts among ideals for the man, woman, and person. *Sex Roles*, **9**, 1223-1248.
- Spence, J. T. 1984 *Masculinity, Femininity, and gender-related traits: A conceptual analysis and critique of current research*. In B. A. Maher & W. B. Maher (Eds.). *Progress in experimental personality research*, Vol. 13. *Normal personality processes*. Orlando, FL: Academic Press.
- Stoppard, J. M. & Paisley, K. J. 1987 Masculinity, femininity, life stress, and depression. *Sex Roles*, **16**, 489-496.
- Sanfilippo, M. P. 1994 Masculinity, femininity, and subjective experiences of depression. *Journal of Clinical Psychology*, **50**, 144-157.
- Taylor, M. C. & Hall, J. A. 1982 Psychological androgyny: Theories, method, and conclusion. *Psychological Bulletin*, **92**, 347-366.
- Waelde, L. C., Silvern, L., & Hodges, W. F. 1994 Stressful life events: Moderators of the relationships of gender and gender roles to self reported depression and suicidality among college students. *Sex Roles*, **30**, 1-22.
- 山野美樹・神村栄一・坂野雄二 1992 各種ストレス場面における対処方略の好みに関する研究 I : 男女差の比較から 日本行動療法学会第18回大会発表論文集, 94-95.
- Zuckerman, D. M. 1989 Stress, self-esteem, and mental health: How does gender make a difference? *Sex Roles*, **20**, 429-443.

—1996. 9. 30 受稿—